

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370048

研究課題名(和文) 中国古代における龍と舟と扶桑にみる復活再生観念の研究

研究課題名(英文) A Study of the Idea of Rebirth : Focusing on the Picture of Dragon, Boats and Fusan in Ancient China

研究代表者

大形 徹 (OHGATA, Tohru)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：60152063

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：太陽を載せるエジプトの三日月の舟の観念は中国にも影響を与えたようだ。太陽が地を潜ったあと復活再生して天空に昇るように、死者もまた舟に乗ってあの世に復活した。中国では仰韶の墓に龍に跨る人の造形がある。龍の原形はワニであり、水平線から天の川を遡り、背に乗る死者の魂を天に運んだのだろう。龍の角は殷・周ではキリンで後に羚羊や鹿の角になる。角をつけなければ空にのぼれないのだろう。戦国から漢代にかけて龍と舟が結びついた。そして被葬者は龍の舟に乗り、あの世に復活再生するという観念が生まれた。これは扶桑の枝に再生する太陽とも重ね合わされた。死者が復活する初期の仙人の原形ともいえる。

研究成果の概要(英文)：The idea of the sun loaded into Egyptian crescent-shaped boat influenced China. As the sun revives and rises after the sun set, the dead ride the boat and also revive in the other world. In China, there is molding of a man riding a dragon in the tomb of Yangshao. The original form of a dragon is a crocodile, it went up to the Milky Way from the horizon, and it probably carried the spirits of the dead people on its back to heaven. In the Yin and Zhou periods, the horn of a dragon is a giraffe's, and later it changed to an antelope and deer's horn. They probably cannot go up to the sky without the horn. From the Age of Civil Wars to the Han period, the boat shaped a dragon was appeared. Then, the idea was created that the entombed people ride on a dragon boat and they revive in the other world. This is same idea as the sun which revive on branches of fusan. It can be said that the early original form of hermit that the dead revive.

研究分野：中国哲学

キーワード：龍 舟 扶桑 復活再生 太陽 エジプト 死生観 尸解仙

1. 研究開始当初の背景

筆者は神仙思想の構造と展開の解明を大きな研究テーマとしている。これまで神仙思想は長生願望の延長としかとらえられていなかった。死にたくないという願望が神仙思想の仙人を生み出したという考え方である。たしかにそれは現代人の感覚からみても普遍的な願望であるように見える。しかし、仙人の話の発端はどれも尸解仙にある。これは一旦、死亡した人が仙人として復活再生したものであるということに気づいた。

2. 研究の目的

復活再生観念については文献的には、ほとんどあらかわれない。しかし文様も含めた図像資料の中に多くあらわれる。これまで、エジプトのスイレンの図像化したパルメット文様や、中央アジアのシカの角の文様の変化した雲気文については、すでに考察し、いずれも中国に流入して、復活再生観念の背景になっていることを考察した。

本研究では、扶桑および龍、舟もまた復活再生観念と関連することを論証することを目的とした。

3. 研究の方法

文字が作られる以前は図像資料しかなく、図像を読み解くことによってそこに描かれる思想を考察した。文献資料があらわれてからは、文献と図像をあわせて考察した。文献資料がまずあって、それにもとづいて図像が描かれた場合と、図像がまずあって、あとから文献ができた場合とを考察した。西方から図像が伝播したとみなせる場合は、まず図像が伝わり、あとから文章ができあがったと考えた。また西方からの図像の伝播によって思想が伝わるがあると考えた。太陽信仰にもとづく復活再生観念は、図像の伝播によって伝わったと考えた。

扶桑については、『山海経』や『淮南子』などの文献に記述がある。『山海経』については、中国人の想像力により不思議な記述がなされた、とは考えなかった。西方から、図像とともに情報が流入し、それを核として、さまざまな話へと増幅されたと考えた。『山海経』にみえる合成動物の記述や図は、じつはオリエントのスフィンクスなどと類似している。

太陽が扶桑の花や実として生まれ出る話や図は、太陽の復活再生観念にもとづく太陽信仰の変形で、十日神話もその中にある、と考えた。

エジプトでは太陽は三日月形の舟に乗り、天空を航行する。中国の龍の原形はワニで、それは被葬者の魂を乗せて運ぶ舟だと考えた。水平線と天空はつながっている。水平線から南北にむけて雲漢（天の川）は流れ

ているように見える。つまり水平線のかなたまで舟でゆけば、そこから天に登りうる。そのことを詠んだ詩や説話などがあり、そのような観念が存在したことは文献上からも裏付けられる。

舟による昇天と龍の背に乗る昇天観念が重ねあわせられ、楚帛画や馬王堆漢墓帛画の龍舟ができあがったと考えた。

龍の角は殷周の青銅器ではキリン（giraff）の形をしている。その形の角は、人や鳥もつけている。それらを比較することによって、龍の原形であるワニにキリン形の角のついたものこそが龍だということになる。角は空を飛ぶための象徴とされたと考えた。

4. 研究成果

5にあげる雑誌論文4篇と図書一冊（その一部に論考）を執筆した。

「戦国楚帛画の舟にみる復活再生観念の考察」は、戦国時代末期から前漢の初期にかけて、被葬者の魂が天界へ昇っていくように見える死生観がうかがえる戦国時代の楚帛画「人物龍鳳図」・「人物御龍図」および前漢初期の馬王堆帛画（「馬王堆三号漢墓T型帛画」・「馬王堆一号漢墓T型帛画」）等について考察した。

従来、儒教の『礼記』郊特性にみえる「魂氣歸于天、形魄歸于地」という記述をもとに、魂魄が分離して、魂が上昇し天に登り、魄が地上に留まるとされていた。けれども、『礼記』の記述は簡単すぎ、馬王堆帛画のさまざまな事物を説明していない。『礼記』には魂の語は3箇所みえる。『礼記』は『儀礼』の「記」つまり注釈とされるが、その『儀礼』の経文には「魂」という言葉すらでてこない。

三号漢墓からは喪制図が出土し、三年喪、斬衰、齊衰といった礼の語がみえ、儒教と無関係ではない。しかし馬王堆帛画自体に関しては曾布川寛氏も「礼の古典に該当するものがない」と説く。たしかに『儀礼』『礼記』等とは無関係である。氏は馬王堆帛画は「死者の靈魂を過度に信仰したこの地方の文化の現れ」と、楚の文化として理解する。「魂」の語は『楚辞』に72箇所もみえ、説得力がある。実際、曾布川氏は『楚辞』の記述にもとづいて馬王堆帛画を説明する。石川三佐男氏もそれを受けて『楚辞』と昇仙図（馬王堆帛画）との関連について詳細に考察している。それらの論考は『楚辞』の解釈にも新境地を開いたものである。

それらをふまえれば楚の文化や伝承をもとに楚帛画や馬王堆帛画が制作されたということには何の疑念もないように思われる。

ところが馬王堆帛画にみえる図像のうち、

いくつかのものが、エジプトあるいは中央アジアの図像と酷似している。馬王堆帛画にみえる太陽中の鳥はエジプトの太陽の中の隼と、月上の蟾蜍は、同じくエジプトの三日月に載る太陽とスカラベに酷似する。

また仙薬の芝草の図は馬王堆の帛画や棺、後漢の画像石などに多出するが、これはエジプトの睡蓮にもとづくパルメット文様であろう。

図像の類似は偶然、あるいは同時発生として捉えられがちである。しかし特異な図像が複数、西と東に存在する

のであれば、それらは伝播したと考えてよいだろう。図像はなぜ伝播したのか、その背後には死生観にもとづいた強烈な願望が潜んでいるのではないか。

それは「復活再生観念」という思想であり、宗教であろう。

夕方に沈む太陽は翌朝、再び生まれ出てくる。古来、かわることのない繰り返し、ゆるぎない太陽信仰を生んだと思われる。この太陽信仰の最も肝要な部分は、それが死者の復活再生と結びつけられたところにある。

隼は太陽の中に入り復活し、スカラベはその太陽を地下から地上に押し上げていく聖なる虫である。睡蓮は太陽が沈むと花を閉じて水に潜り、翌日、太陽が昇るとまた水から顔を出し花を開く。太陽の復活再生を象徴することから死者の復活を願ってミイラにも捧げられた。この睡蓮の文様、パルメットは復活再生という意味を内包し、おそらく、そのことが原動力となって世界各地へと伝播していった。ヨーロッパでは装飾文様として発展し、ユリの花と呼ばれた。中国では芝という仙薬となる。

パルメット文様は中央アジアではオオツノジカの角の文様と習合した。シカの角は毎年落ちては生えかわる。そのことが復活再生のシンボルとされた。

中央アジアでは葬送用の馬に、わざわざ作り物の鹿の角がつけられている。

この鹿の文様は中国にも入ったが、オオツノジカの角の形が認識されず、雲気とみなされ、その後、雲気として発展変化していく。

中国に入ったパルメットは龍と結びつき、直接、龍の尻尾に生えることもあった。またシカの角の文様にもとづく雲気文も龍の体から生えている。いずれも中国の龍と結びついたのである。

一見、無関係なもの同士が結びついたようにみえるが、吉祥づくしの松竹梅と同様に吉祥となるものを重ねあわせ、文様のもつ呪力を高めようとしたのであろう。墓室中に、それらを数多く描くことで被葬者の復活再生を助けようとしたのだらう。

上記の話は、これまでの拙考の概括だが、本研究では、それらにもとづき、墓葬とかかわる舟、龍、扶桑について論じた。

舟は現実の交通手段であるが被葬者の魂にとってはあの世に行くために必要なものであった。龍もまた舟が作られる以前よりある被葬者の魂の乗り物とみなしうる。

中国では、龍に託された昇天観念が、太陽の復活再生観念と結びついた舟および扶桑と習合し、龍舟となった。そして中国の戦国時代から漢代にかけての死生観を形成した。それは死者のあの世での復活再生を願ったものであった。それがのちの時代の墓葬に関わる絵画の基礎となり、また神仙思想にも大きな影響を与えた。これらは儒教の祖霊観念とは明かに異なっている。

舟と葬送の組み合わせの例は世界各地にみえる。もっとも古いものはエジプトとされ、クフ王の太陽の船が知られる。シルクロードの小河墓では紀元前の舟形の棺が発見され、戦国時代の中山王国にも実際の船が副葬され、葬船とみなされている。また四川省などの断崖絶壁に棧を打ちこみ、舟形の棺を置く懸棺葬は仙船、龍船などと呼ばれているが、舟が天高く飛昇し、被葬者の魂を天界に運ぶイメージがある。

楚帛画や馬王堆帛画にも龍が船の形となったものが描かれる。美術史の観点から曾布川寛氏は、馬王堆帛画の龍は舟の形であることを楚帛画の「人物御龍図」と対照させて論証し、その行き先は崑崙山だとした。その論考は鋭いが、舟そのものについては深く考察されることがない。

馬王堆からは帛画とともに舟の壁画が出土しており、龍暎路氏は「招魂図」という。

龍が舟の形に湾曲する「人物御龍図」とよく似た楚帛画の「人物龍鳳図」がある。この図の写真版の右下部分に三日月形の舟の一部がみえる。けれども、従来、考察の根拠とされてきた白描図では、この部分は描かれていないのである。白描図は原画にない角がつき、尻尾の形が異なるなど杜撰であるが、これまでは、この図もとづいて、女性と鳥と龍のモチーフには連関がない、と考察されてきた。ここに白描では消えている三日月形の一部を舟として認識すれば、

「人物龍鳳図」(龍+舟) 「人物御龍図」(龍舟) 「馬王堆(三号墓・一号墓)帛画」(龍舟)(三号墓帛画は龍4頭、一号墓帛画は龍2頭)

という簡略化した図式が可能となる。

龍と舟が習合したのである。舟に乗って昇天と、龍に乗って昇天するという考えがあわさって、舟の形の龍に乗って昇天するようになったのであろう。

舟に乗って昇天という考え方には遠くエジプトの太陽の舟の考え方が影響しているかもしれない。エジプトでは太陽が三日月の舟に乗って天空を航行すると考えた。エジプトの舟はアシ舟(パピルス束ねたもの)で、その形状は三日月形である。その

ため月は満月や半月でなく三日月に描かれた。

馬王堆帛画の月もまた三日月である。

ここには蟾蜍と兔が描かれるが、エジプトの三日月の上に太陽とスカラベ（太陽を地下から押し上げる聖なる虫）と女性が載っている図に酷似している。

馬王堆の太陽に鳥の図もエジプトに太陽にハヤブサの図（ハヤブサはオシリスで太陽に入り復活）がある。エジプトでは三日月に乗る太陽が天空を航行したのち、地下に潜り、そのあと復活する。これとミイラとなった死者が復活する観念が重ね合わされる。

「日没（死）」と「日の出（生）」を根幹とした太陽信仰があちこちにあらわれるのである。

馬王堆帛画でも上部の太陽だけではなく、扶桑とその枝から生み出される小さな太陽が描かれる。

従来、これは、扶桑と十日という太陽伝説にもとづく、と神話的世界が描かれるとされた。

けれども、これもまた太陽が新たに生まれ出るとともに被葬者もあの世で復活再生することを願ったものとみなすべきであろう。古代の絵画は、呪術的絵画と呼ぶべきもので、描かれた画題が実現することを願ったものといえる。

なお扶桑もまたオリエントの生命樹やエジプトの靈魂の樹の影響があるかもしれない。中国では三星堆、楚の漆画にもみえ、馬王堆帛画の扶桑は中央アジアのシカの角の形と習合し、後漢の画象石にも多出する。

「龍角考 その一、麒麟の角」、「龍角考 その二、鹿の角」では、龍の角について考察した。龍に関する書物や論考は数多い。龍は実在しない動物だとみなされている。そのため、その起源の動物をさぐる場合は、ヘビやワニがそうだとされる場合が多い。いずれであっても角はない。そのため、龍になぜ、角があるのかについては、かなり重要な問題であるはずだが、これまで、ほとんど考察されていない。

私自身は、龍の原形の一つがワニだと考えている。林巳奈夫氏が揚子江ワニの顔に似ているという説をあげているため、実際の揚子江ワニの写真をもとに比較してみた。このワニの顔は長くなく鼻先が上を向いて、その顔は殷周時代の青銅器に造形されたワニの顔によく似ている。

しかし青銅器などの龍の多くは角をつけている。角とはいえ、先端が尖っておらず、ボーリングのピンに似ている。林巳奈夫氏は茸型の角と呼んでいる。かつて「私にはアフリカのキリン(giraff)の角にみえる」と述べたが、上海の博物館の副館長の陳佩芬氏もまた「長頸鹿角(キリンの角)」と述べている。アフリカのキリンの角である。

この形の角は、じつは龍だけでなく、人

や鳥にもつけられている。人や鳥には角はないので、この角は、生えているものではなく、後からつけたものだとなる。

冠をかぶるように取り付けられたものとみなしうる。それをつけることによって、天空まで昇ることのできるシンボルなのだろう。

麒麟型の龍の角は戦国時代、漢代あたりからほとんど消えてしまう。

「龍角考 その二、鹿の角」では、龍の角のさまざまなバリエーションについて述べた。副題はシカの角としたが、シカの角となるのは、かなり遅い。唐代以前の図では、シカとみなしうるものは、ごくわずかである。

ここでは、「みづちの角」についても考察した。水の中にすむ「角の無い龍」だが、まさにワニであろう。

「尺木」についても考察した。「龍に尺木無ければ、以て天に升る無し」というのが基本概念だが、これについては議論百出である。頭に「尺木」と呼ばれるものをつけることによって、昇天できるのであれば、殷周の龍の角とよく似ている。

『列仙伝』子英では、龍ではなく「赤い鯉」であるが、頭に角が生え、翅翼が付き、子英を乗せて昇天している。

『列仙伝』には龍が人を乗せて昇天する例が多くある。魚に角が生えるのは、龍に近づく意味があるのかもしれないが、角が生えてこそ昇天できるのである。

これまで、殷周の青銅器の龍、楚帛画の龍、舟、馬王堆漢墓の龍舟に関して、一貫した流れのもとで考察されることはなかった。いずれも墓葬と深く関わっている。そしてそれらは古代の中国人が考えた死後の世界とも深く関わっていると考えた。

それは「タマシイ」を天界に運び、そこに復活再生させるということであろう。このことは儒教が生まれるはるか以前から中国にあったと思われる。

仰韶の遺跡に貝殻を並べた龍と虎とされる造形がある。龍は被葬者の魂を天にはこぶものと考えられている。儒教が生まれたあと戦国時代の楚帛画や馬王堆漢墓の帛画には「龍」によって「魂」が天界に運ばれる様子が描かれている。

それらは儒教の死生観とは大きく異なっている。そして仙人や神仙思想の誕生と表裏一体になっていると思われる。文献的には神仙思想がなぜ生まれたのかということは、いまひとつ明確ではない。けれどもこれらの図像とあわせて考察することによって、その輪郭が見えてくるのではないかと思われる。

のちに道教が生まれたあと、神仙思想は、そこに取り込まれていく。儒教的死生観と道教的死生観は相反するものだろう。しかし、戦国・秦漢時代には、それらの死生観は、微妙なバランスの上に並存しているよ

うにみえる。それらの関係を考察することが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

大形徹、字説「東」と扶桑が結びつけられる理由、漢字学研究、査読有り、第4号、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所、2016、原稿提出済

大形徹、龍角考—その二、鹿の角、人文学論集、査読無し、第34集、2016、75-92

大形徹、龍角考 その一、麒麟の角、人文学論集、査読無し、第33集、2015、13-44

大形徹、戦国楚帛画の舟にみる復活再生観念の考察、人文学論集、査読無し、第32集、2014、23-43

〔学会発表〕(計4件)

大形徹、龍の角について キリン・レイヨウ・シカ、説話文学美術研究会、大阪府立大学(大阪府堺市)A15-301、2016.3.27

大形徹、中国古代の人物画と龍 龍にはなぜ角があるのか、府大講座、大阪府立大学Uホール(大阪府堺市)、2014.9.25

大形徹、戦国楚帛画の舟よりみる復活再生観念、日本中国学会第65回大会、於秋田大学(秋田県秋田市)、2013.10.12

大形徹、戦国楚帛画について、人文学会、学術交流会館(大阪府堺市)、2013.5.24

〔図書〕(計1件)

山口裕文・金子務・大形徹・大野朋子編 『「中尾佐助の照葉樹林文化論」の展開』、北海道大学出版会、2016、「『莊子』にみえる植物—扶搖・冥霊・大椿・櫟—」を執筆

6. 研究組織

(1)研究代表者 大形 徹(OHGATA Tohru)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号： 60152063

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 辻尾 榮市(TSUJIO Eiichi)

大阪府立大学・人間社会学部・客員研究

員

研究者番号：10458002